

蒲生干潟の地形変遷（5）

■概要

新しい導流堤の建設により、閉塞していた震災前の河口が再び開いた。昨年の秋にできた北側の新たな河口は漂砂の堆積により閉塞した。北側の河口は一時的なものであった。

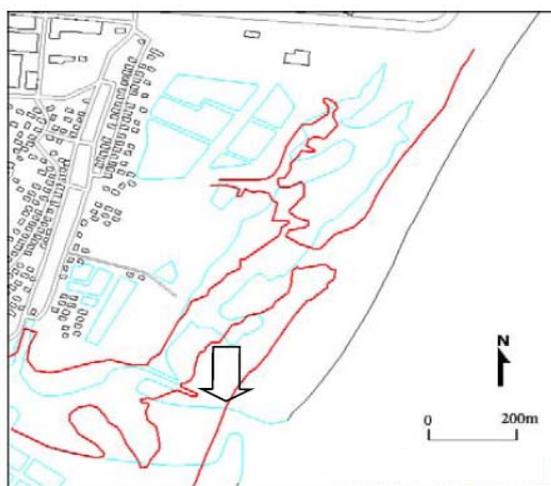


Fig.1 2011年10月11日のトレース

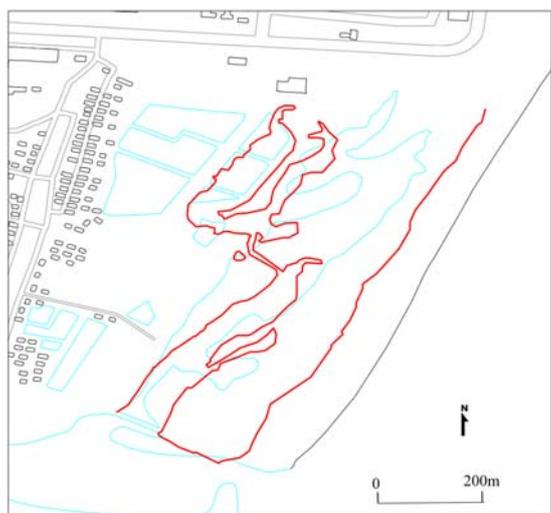


Fig.2 2012年4月18日のトレース

■導流堤の工事による河口の復元

昨年10月と今年4月の調査トレースをFig.1とFig.2に示す。昨年の東北地方太平洋沖地震による大津波で破壊された導流堤にかわって、震災前の河口付近の海中に没した導流堤とほぼ同じ位置に、石積みの構造の導流堤が建設されている（No.32で報告）。新しい導流堤の建設にともない、七北田川の震災前の流路が確保され、昨年の9月から閉塞していた元の河口（Fig.2矢印の位置）に開口部が確保され、震災前とほぼ同じ位置に河口が戻った。また、昨年の10月に形成が確認された北側の河口（No.25で報告）が完全に閉塞したことが確認された。もとの流路が復元された影響により、干潟の潟湖内を北上する流れが弱まり、流れによる浸食作用に対して仙台湾沿岸部の漂砂の堆積作用が優勢になったために閉塞したと考えられる。

■潟湖の汀線と海岸線の変化

河口の位置はもとに戻りつつあるが、あくまでも人工的な措置であり、元の干潟のようすが復元されるわけではない。干潟内のトレース（Fig.2）を見てわかるとおり、潟湖の奥行きは震災前に及ばないものである。また、東側の海岸線の位置も、震災前と比べると、かなり西側に後退したままである。しかしながら、海岸線の位置は昨年10月に確認された位置（Fig.1）よりは、全体的にやや東側に移動しており、砂浜が沖合に向かって成長しているようすがうかがえる。今後、漂砂の堆積作用が強まり進行していくことにより、徐々に元の位置に海岸線が戻っていく可能性がある。

■まとめ

導流堤の建設は、人工的に七北田川の河口閉塞を破り、元の七北田川の流路を取り戻していた。自然に任せる環境の変化とは異なるものではあるが、干潟北側の河口をふさぐことで干潟の環境を落ち着かせる効果があろう。地形変化を記録し考えていくうえで、流路復元が人為的であろうがなかろうが、そこにすむ動植物の変化を生み出す要因の一つであるという観点から、継続した調査が必要となる。